## 祝言の音・声・音楽―能楽とその周辺

**研究代表者：藤田隆則　　プロジェクト研究**

共同研究員：上野 正章（本学客員研究員）、恵阪 悟（帝塚山大学）、沖本 幸子（東京大学）、鎌田 紗弓（東京国立文化財研究所）、荒野 愛子（神戸女子大学）、近藤 静乃（東京藝術大学）、柴 佳世乃（千葉大学）、曽村みずき（学術振興会特別研究員）、高橋 葉子（本学客員研究員）、田草川 みずき（千葉大学）、長田 あかね（神戸女子大学）、丹羽 幸江（本学客員研究員）、根本 千聡（日本伝統音楽研究センター特別研究員）、坂東 愛子（日本伝統音楽研究センター共同研究員）、吉岡 倫裕（日本伝統音楽研究センター共同研究員）、武内恵美子（本学准教授）

**開催趣旨：**

祝言とは、本来、時の節目を刻む特別な機会において、場所や人々を祝福するための言語行為を意味するが、特定の儀礼や儀式といった文脈の中で、その言語行為を声にのせて唱えること、その機会に演奏される祝福を目的とした音楽なども、ひろく、祝言ととらえることができる。また松の声など、めでたさを象徴する事物が発する音やそのイメージも、祝言に含めてもよいかもしれない。本研究の目的は、研究代表者が専門としている能楽を中心にした日本の音楽・芸能における、祝言を実行するための音の選択、組織化、その価値付けの方法や言説などについて、総合的に考察することである。

2023 年度の研究会

開催月日:５月 12 日（謡鏡講読部会）、６月２日（謡鏡講読部会）、７月７日（謡鏡講読部会）、８月４日（謡鏡講読部会）、10 月６日（謡鏡講読部会）、11 月３日（謡鏡講読部会）、12 月１日（謡鏡講読部会）、１月５日（謡鏡講読部会）、２月２日（謡鏡講読部会）、２月 21 日（話題提供：恵阪悟）、２月 28 日（ゲスト：樹下文隆）、３月１日（謡鏡講読部会）、３月６日（話題提供：長田あかね）、３月 14 日（話題提供：沖本幸子）、３月 27 日（ゲスト：大谷節子）

2023 年度の研究成果

・祝賀能〈翁〉付〈高砂〉特別企画：インタビュー＆エッセイ（https://www.kcua.ac.jp/jtm/okina-takasago/）
・でんおん連続講座特別編前編「〈翁〉付〈高砂〉の歴史と背景」2024 年２月 21 日（水曜日）～３月 27 日（水曜日）、伝音セミナールームにて開催

## 儒教と文人の世界観に展開する「楽」思想の諸相研究

**研究代表者：武内恵美子　　プロジェクト研究：**

共同研究員：明木茂夫（中京大学　教授）、遠藤徹（東京学芸大学、教授）、小林龍彦（前橋工科大学　名誉教授）、小島康敬（国際基督教大学　教授）、高橋博巳（金城学院大学　名誉教授）、平木實（天理大学　元教授）、南谷美保（四天王寺大学、教授）、渡辺信一郎（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター　所長）、趙維平（上海音楽学院　教授）、唐権（華東師範大学外国語学院、助教授）、平間充子（京都市立芸術大学　客員研究員）

**開催趣旨：**

本研究は、平成 25 年度から４年間かけて行ってきた共同研究「近世日本における儒学の楽思想に関する思想史・文化史・音楽学的アプローチ」の成果を踏まえ、更に展開させるものである。

儒教は古代中国に端を発し、東アジア全体に波及し多大な影響を及ぼした思想、宗教である。その中心的役割の一軸として「楽」思想があるが、楽思想は単に音楽の思想にとどまらず、政治、文学、歴史、数学、天文学と関連し、また儒学を超えた、文人世界の形成

にも大きく影響を及ぼした。

日本にもその影響は及び、古代から近世にかけて、研究・普及がなされてきた。また、江戸時代には、文人的概念が定着し、日本に於いても独自の世界観が成立、展開した。これら楽思想を通して展開した文化に共通する、普遍的な世界観を、様々な角度から見出し、東アジア世界との対比も含めた文化の諸相を多角的に見出すことを目的とする。

この種の研究は近年ようやく行われるようになってきたが、分野を超えた交流はなかなか実現できない。共同研究の形態で、思想史、文化史、音楽学、歴史学、数学史など、学際的に 1 つの話題を議論する場を提供し、それぞれの分野の認識を深めつつ、ジャンルを超えた文化の概念を探ることが本研究の意義であり特徴である。

2023 年度の研究会

2023 年 4 月 23 日　部会　漢詩の検討 1
2023 年 5 月 29 日　部会　漢詩の検討 2
2023 年 7 月 3 日　部会　漢詩の検討 3
2023 年 9 月 4 日　部会　漢詩の検討 4
2023 年 10 月 16 日　部会　漢詩の検討 5
2023 年 11 月 26 日　部会　漢詩の検討 6
2024 年 1 月 15 日　部会　漢詩の検討 7
2024 年 2 月 15 日　部会　譜本の検討、最終調整 1
2024 年 2 月 24 日　部会　譜本の検討、最終調整 2
2024 年 3 月 11 日　部会　最中調整 3
2024 年 3 月 22 日　プロジェクト研究会（公開講座合同開催）「尺八と七弦琴」
2024 年 3 月 23 日　プロジェクト研究会　最終回、報告書の検討他

## 日本音楽研究における基礎的資料の再検討と新たな活用に向けて

**研究代表者：竹内 有一　　共同研究**

共同研究員：青木由貴（邦楽演奏家）、大西秀紀（本学客員研究員）、神津武男（早稲田大学演劇博物館招聘研究員、本学客員研究員）、小西志保（邦楽演奏家、竹内研究室研究嘱託員）、常岡亮（邦楽演奏家、常磐津協会理事）、出口実紀（大阪芸術大学非常勤講師）、配川美加（東京藝術大学非常勤講師）、福持昌之（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課主任・文化財保護技師）、細野桜子（邦楽演奏家）、前島美保（国立音楽大学准教授）、村井陽平（同志社女子大学准教授）

いくつかの分野における基礎的資料の学術的再検討を行い、日本音楽史の諸課題を考察した。主な課題は下記の通りだが、必要に応じ新たな課題も設定した。課題ごとにチームを組んで調査・研究等の作業を進め、適宜、成果公開を実施した。

（1）常磐津家元旧蔵『常磐種』の基礎的研究

江戸期代々の常磐津家元が書き継いだ上演記録集『常磐種』（とくわぐさ、全 5 冊）を研究対象資料とし、その総合研究を 2022 年度から 10 年かけて実施するプロジェクトである。各年度末に成果を報告書として刊行する。『常磐種』および研究内容の委細・意義・特色・成果の委細については、年度ごとの下記報告書を参照いただきたい。

2023 年度は、2022 年度からの継続で「天之巻」の調査研究を進め、「天之巻」の翻刻の編集、注釈の執筆等を行い、翻刻・注釈を収載する調査報告書を刊行した（『常磐種 2 天之巻（翻刻と注釈）』（常磐津節の伝承資料に関する調査報告書 2023 年度）、2024 年 3 月、常磐津節保存会発行、文化庁助成事業）。また、「地之巻」の調査にも着手した。

＊研究会開催日：（2023 年）4 月 14・21 日、5 月 2 日、7 月 28 日、11 月 8 日、12 月 18 日、（2024 年）1 月 9・16・23・30 日、2 月 6・27 日、3 月 12 日
＊場所：日本伝統音楽研究センター、オンライン

（2）岸沢三蔵著『老の戯言』の発展的研究

2022 年 3 月に刊行した『『老の戯言』（注釈）―『都の錦・老の戯言』その三―』（常磐津節保存会発行）に掲載できなかった「時代世話混雑の部」の注釈を作成するため、当該部分の調査研究を深めて注釈原稿を作成し、紀要に投稿する計画を立てた。十分に実施できなかったので、2024 年度以降に持ち越す予定であ

る。

(3) 日本伝統音楽に関する江戸期史料の書誌学的研究

前年度に引き続き、日本伝統音楽に関する文献資料（謡本・浄瑠璃本・うた本、理論書・歴史書など）について、それらの歴史的・学術的意義を再検討するため、書誌的な側面に着目しながら、原本や参考文献の調査収集等を行った。早稲田大学演劇博物館拠点研究の常磐津節板木研究チームとも連携し、常磐津節板木とその印刷物に関する調査研究も進めた。研究成果の一部は、JSPS 基盤研究（B）20H01205「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者：竹内有一）に基づいて長期計画で準備を進めている西村文庫公開の際にも活用する予定である。

＊研究会開催日：（2023 年）4 月 6・25 日、5 月 12・26・30 日、6 月 2・9・10・16・23・30 日、7 月 6・14・28 日、8 月 3・18 日、9 月 1・8・15 日、10 月 10・17・18・24・25・31 日、11 月 1・7・13・20・28 日、12 月 6・20・22・26 日、（2024 年）2 月 19 日、3 月 19・26 日

＊場所：日本伝統音楽研究センター、オンライン

(4) 日本伝統音楽研究センター収蔵楽器の基礎的研究

今年度は 10 月のキャンパス移転のため、楽器を含めた収蔵資料の移設作業に協力するなかで、楽器以外の未整理資料の状況確認とそれらの新たな活用方法について検討した。2024 年度以降は、資料委員会の業務と関連づけながら、楽器以外のレコード資料、未整理の特別コレクション資料等の保存活用の方法を具体的に提案していきたい。

＊研究会開催日：（2023 年）8 月 11・22 日、9 月 29 日、12 月 5 日

＊場所：日本伝統音楽研究センター

(5) 崇仁お囃子会と柳原六斎念仏（伝承補佐と演目復活に向けて）

崇仁祭り囃子の調査研究については、2022 年度に公開講座を主催し、一定の成果を得ているが、引き続き大学の地域連携の観点から、竹内研究室として崇仁お囃子会をサポートする社会貢献活動と、崇仁祭り囃子のルーツである柳原六斎念仏の調査と演目復活に向けた研究を継続した。また、地元の小学生にお囃子の楽器に親しんでもらうため、おもちゃ笛作りのワークショップを崇仁児童館・崇仁教育連絡会の協力で 2 月に実施した。

＊研究会開催日：（2023 年）4 月 27 日、5 月 11・14 日、6 月 1 日、（2024 年）2 月 13・24 日、

＊場所：下京青少年活動センター、日本伝統音楽研究センター

(6) 三味線革張りの実践的研究（職人が継承する「わざ」の考察）

7 月 11 日、日本伝統音楽研究センターにおいて、大阪の三味線職人をゲストに招いて、共同研究員より貸与を受けている革張り機を用いて、共同研究員および学生の有志とともに、革張りワークショップを 1 回実施した。

## 様式分化をとげた雅楽を対象とする伝承実態調査

**■研究代表者：田鍬　智志　　共同研究**

■研究期間：2021 年度～ 2023 年度予定（延長予定）

共同研究員：上野 正章（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）、志川 真子（総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程）、Andrea GIOLAI（ライデン大学人文学部日本学科講師）、田鍬 智志、出口 実紀（大阪芸術大学芸術学部音楽学科特任教授）、前島 美保（東京藝術大学音楽学部准教授）、増田 真結（京都教育大学教育学部准教授）、松尾 象空（オブザーバー／青葉山松尾寺住職）

＊所属は 2024 年 3 月現在

■趣旨：全国各地で伝習されている雅楽のなかには、宮内庁楽部・南都楽所・四天王寺楽所雅亮会などの「標準的雅楽」の旋律・リズムとは著しく様式の異なる雅楽が伝承・伝習されている。舞鶴・松尾寺佛舞の付随雅楽は、知られている稀有な例であるが、そのような雅楽は往々にして、標準的雅楽との相違が認知されていないために、民俗芸能調査などで記録対象とされることが皆無に等しく、分布・伝習の実態が全く知

られていない。そのような様式分化した雅楽は、音楽伝承における様式分化のメカニズムを考えるうえでも、また、「標準的雅楽」の過去の音楽様式をさぐるうえでも、貴重な伝承である。しかし、そのような様式分化の著しい雅楽は、後継者の人材不足による消滅化の惧れもさることながら、往々にして、スタンダードな雅楽家の介入や、SNS などの情報源の普及によって、その音楽が「標準化」してしまうことも危惧される。よって、本調査研究では、そのような様式分化の著しい雅楽の伝承の実態を調査し、その音楽を詳細に記録する。本調査研究でとりあげる雅楽は以下のような原則として、以下の要素を満たすものを指す。

1）伝承曲に古典雅楽の曲名を冠するもの。（＊したがって吉備楽などは原則として調査対象外とする）

2）編成に横笛だけでなく篳篥（くわえて笙）がふくまれるもの。（＊したがって北陸・東北・東海地方などに伝承される舞楽系芸能（稚児舞など）の付随音楽などは原則として調査対象外とする）

3）標準雅楽の旋律、奏法、リズムとは著しくことなるもの。

■ 2023 年度調査成果の概要

前年度にひきつづき現地調査を実施した。程度の差はあれ、太鼓を打つところ、キリ所（ブレスをいれる箇所）、ピッチの取り方、吹止句の付け方などにおいて、それぞれの伝承地での独自性が育まれつつあることを確認した。また、明治期真宗諸派ではいち早く近代的教育制度を採り入れ、そこでは、寺の子弟だけでなく門徒も受講できたこと、カリキュラムのなかに奏楽があったことなど、民間雅楽普及の一因になったとも推測しうる事象を確認した。

■調査活動記録

04.22 調査方針の検討：上野・田鍬。

05.05 下新川神社楽人（守山市 下新川神社例祭）：上野・田鍬。

05.08 松尾寺仏舞保存会調査（舞鶴市 松尾寺仏誕会）：GIOLAI・田鍬。

05.09 研究方針の検討：GIOLAI・田鍬。

05.10 伝音公開講座「順次往生講式」習礼：GIOLAI・田鍬（京都市 大原寺勝林院・実光院）。

05.11 京都大学附属図書館調査：GIOLAI。

05.12 奈良大学附属図書館調査：GIOLAI。

05.13 伝音公開講座「順次往生講式」：GIOLAI・田鍬・上野（京都市 大原寺勝林院・実光院）。

05.14 楽講調査（有田市 得生寺中将姫来迎会式）：出口・GIOLAI・田鍬。

05.19 滋賀県立図書館調査：上野。

05.20-21 錦織寺雅楽会調査（野洲市 錦織寺親鸞聖人御誕生会）：上野・田鍬。

07.18 調査方針の検討：上野・田鍬。

11.22 総会：上野・志川・松尾・増田・出口・田鍬。

12.13 龍谷大学図書館資料調査：上野・増田・志川・出口・田鍬。

01.30 録音聞きおこし作業等：上野。

02.02 録音聞きおこし作業等：上野。

02.25（旧）賤岳義会調査（長浜市 伊香具神社オコナイ神事）・宇根雅楽会調査（長浜市 春日神社祈年祭）：上野・松尾・田鍬。

03.03 研究方針の検討：GIOLAI・田鍬。

03.05 録音聞きおこし作業等：上野。

03.07 調査方針の検討：上野・田鍬。

03.08-09 録音聞きおこし作業等：上野。

03.16 小篠原楽人調査（野洲市 稲荷神社拝殿竣工奉祝祭）：上野・田鍬。

03.18 録音聞きおこし作業等：上野。

03.20 正浄寺の雅楽保存会調査（大田原市 正浄寺春彼岸永代経法要）：田鍬。

03.26 録音聞きおこし作業等：上野。

03.28 調査方針の検討：上野・田鍬。

## 酒場と音楽

**■研究代表者：齋藤　桂　　共同研究**

共同研究員：秋山良都 京都大学／ライプツィヒ大学学術振興会特別研究員 PD）、上畑史（人間文化研究機構）、薗田郁（大阪大学中之島芸術センター）、濱崎友絵（信州大学准教授）、早坂牧子（東京音楽大学准教授）、樋口騰迪（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員）、矢野原佑史（京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員）

■趣旨

芸術音楽や、それに基づいて構築された音楽観では、作品のもつ情報を余すことなく聴き取ることが理想とされる。そのような聴取のあり方の対極にあると言えるのが、騒がしい中で、酩酊状態になり鈍った聴覚によって音楽を楽しむ、酒場における音楽だろう。

しかし、世界の多くの地域で、酒場が音楽文化の揺籃地になってきたことは事実である。

酒場は時に、芸術音楽よりも露骨に聴衆の思想や欲望を反映させた音楽が奏でられる場でもあった。そのため、連帯感の創出や帰属意識の強調、懐旧の情の生成などにおいて、伝統音楽やそれにかかわる音楽的要素が絡むことも多い。

本共同研究では日本、ドイツ、セルビア、トルコ、イギリス、フランス、カメルーンなど様々な国・地域の様々な時代で、酒場が揺籃した音楽文化のありようを通じて、その役割や特徴を検討する。

■ 2023 年度研究会開催日

11 月 3 日

■活動

ちんどん通信社の林幸治郎氏と、新内演奏家の重森三果氏をゲストとして招き、実演と講演をして頂いた。